

羽東山香下寺



鹿舌山と呼ばれた羽東山（右）

初日の出登山でにぎわう羽東山。その山頂に千手観音せんじゆを本尊とする香下寺奥の院こうげじがあります。羽東山は平安時代から和歌に詠まれた名所ですが(市史第3巻古代・中世資料)、香下寺が位置する山を指す名称として定着するのは江戸時代以降のことです。それ以前の文献には「鹿舌山かしたやま」と記されており、観音信仰の山として知られていました。現在山頂にまつ

られている千手観音像は、平安時代末の作風を忠実に写して江戸時代に再建された立像とされ(市史別編2「さんだの文化遺産」)、観音伝承の古さを物語っています。

鹿舌山の名称は、南からみた特徴ある山容を鹿の舌に見立てたことに由来すると思われまます。現在では香下と記されますが、これは南北朝の合戦を記録した「太平記」にもみえる当て字です。おそらくは山容にちなんだ鹿舌山の名が先で、それが麓ふもとの地域や寺院の名称となり、さらに字が置き換えられたものと考えられます。このように地名の由来が資料的にはっきりするのは大変珍しい事例です。また歌枕としての羽東山は元来特定の山を指していなかったと思われまますが、いつしか特徴ある山容と観音信仰で彩いろどられた鹿舌山を指す山号として定着していったようです。

「太平記」巻36には、康安元(1361)年の秋「摂津の国の源氏松山は香下の城をこしらえて南方に牒ちようし合わせ播磨路を差しふさいで人を通さず」とあります。ここに見える松山氏は現在の武庫川沿い三輪地区の土豪です。この記述から香下に城が築かれて南朝方の拠点となったこと、そしてこの地は摂津・播磨両国の接点とみなされたことがわかり、当時の三田の地理的・政治的な地位がうかがわれます。なおこの「香下の城」は、羽東山中腹から山頂にかけて現存する大規模な山城の遺構(市史第3巻参照)に相当すると考えられます。新春登山にあわせて、鹿舌山・羽東山をめぐる悠久の歴史に思いをはせてみてはいかがでしょうか。